

# アフリカ産油国へ原油価格が与える影響

## —ナイジェリアを例に—

神戸大学大学院生 出町 一恵

アフリカ大陸には現在も貧困問題を抱え、低開発に苦しむ国が多く見られる。その一方で、アフリカの産油国は 2000 年代を境に、エネルギー資源を含む新たな天然資源の供給者として世界経済においてその重要性を増しており、近年急激な経済成長を見せている。

近年では IT 技術の発達、国際的な市場の整備が進んだことによる国際金融市場の発達と拡大により、先物市場で取り扱われるコモディティの金融商品化が進んだと指摘されるが、実際にこのような原油価格の変化やボラティリティは以前と比べ変化してきているのであろうか。また、これら原油価格変化や変動は現在、経済的に発展途上にあるアフリカの産油国にどのような影響を与えているのだろうか。

以上のような問題意識から、本分析ではサハラ以南アフリカの代表的な産油国であるナイジェリアを事例として取り上げ、アフリカ産油国のマクロ経済へ国際原油価格がどれほどの影響を与えているのか、2001 年 1 月から 2009 年 9 月までの月次データを用いて分析する。その際、ナイジェリアの消費者物価指数(CPI)、M2、中央銀行政策金利、名目為替レートと原油価格を変数とした 5 変数の構造 VAR モデルを用いる。さらに、原油価格の影響を、価格変化率、急激な上昇 (Hamilton Index)、急激な下落 (逆 Hamilton Index)、ボラティリティの 4 つに区別して分析を行う。ボラティリティについては、EGARCH モデルを用いて推計したデータを用いた。

推計結果より、原油価格の変化や不確実性はナイジェリアの為替レートには比較的大きな影響を与えていることが示されたが、原油価格から物価への直接的な影響は確認できなかった。また、原油価格の政策への影響に関し、原油価格の急激な上昇に対しては政策金利の上昇が見られ、中央銀行が金融引き締めを行っていることが示された。その一方で、原油価格自体のショック、原油価格の急落 (逆 HI)、不確実性の増加に対して政策金利は反応を示さなかった。この分析より、国内信用市場が未発達であるナイジェリアのような産油国にとって、国内経済への影響に対処するための政策ツールは限られており、国内の急激なインフレを抑制しながら原油価格からの経済への影響に対処することの難しさが明らかとなった。